

C・G・カーシカル編

シユラウタ祭全書 第一卷 英文部第二部

辻 直 四郎

本書全般については、その第一巻梵文部ならびに英文部第一部分が出版されたとき、本誌上で紹介し、その高い学術的価値を推称し、この大規模な企画が支障なく進捗することを希望した(東洋学卷三号、一九五八年)。このたび英文部第二部が刊行され、梵、英両部ともに第一巻の完結を見たことは、学界のため欣喜にたえない。

本第二部は、各種の願望を成就するために行われる多種多様の願望祭 (VII. Optional sacrifices, *Kāmya ishtayah*)、季節祭 (Cātumnāsyaṇi) およびこれに関連をもつ種々の祭式 (VIII. The Cātumnāsya. IX. The optional and other forms of the Cātumnāsya. XII. Cātumnāsya with animal-offerings. Paśukacātumnāsyaṇi) 独立の供獻祭 (X. The animal-sacrifice. Nirūdhapastubandha) および特別の願望を伴ふ供獻祭 (XI. Optional animal-sacrifices, *Kāmyāḥ paśavah*)、祭獸とメラー酒とを主要供物とし、興味ある要素に富むサウトラーメーニー祭 (XIII. Sautrāmaṇi) のほか、祭式的一般規則 (XIV. General rules. Paribhāṣā) 儀式の一部として唱誦される祖先

批評と紹介 辻

の系譜 (XV. The *Pravaras*)、葬送儀式 (XVI. The *Pitṛmedha*) を収め、第一・第二部の補遺と正誤、附録、主な術語と題目の索引をもって終っている。

記述の方法・体裁は、第一部と同じで、原則としてパウダーヤナ・シユラウタ・スートラの当該箇所を基礎とし、次いで他のスートラの相応箇所を摘記している。いわゆる「七ハヴィル・ヤジュナ (供物祭)」の全貌が、ここに平明な英訳を通して提示され、古代インドの祭式に興味をもつ研究者に、測り知れぬ便益を与えることとなった。ハヴィル・ヤジュナはソーマ祭ほど複雑ではないが、ヴェーダ祭式の基本的要素を含み、各種のソーマ祭の敘述は、この知識を前提としているから、祭式研究に志す者が、簡から繁へと順次に進むためには、ハヴィル・ヤジュナに精通する必要がある。すでに第一部に含まれている新月・満月祭とこの第二部に含まれる独立供獻祭とは特に重要で、やがて第二巻に収められるベキソーマ祭の基本形アグニ・シユトーマ祭と合せて、シユラウタ祭構造の依って立つ三基石と称してもよい。梵文部の供獻祭に関する部分が、ほとんど全くマントラのみを挙げているのは、一見奇異の感を与えるが、これはもちろん周知の理由に基づくものである。すなわちブラーフマナ文献は独立供獻祭を認めず、アグニ・シユトーマ祭の一部をなすアグニ・シヨミーヤ・パシユを供獻祭の基本形としているからである。従ってスートラの規定の根拠となった儀軌は、第二巻梵文部の出版をまって、その中に含まれるアグニ・シユトーマ祭の当該部分に求めなければ

ならない。プラーフマナ文献中の儀軌すなわち「スートラ要素」とシユラウタ・スートラとの関係を追求する者に、本書が与える便宜は大きい。しかし印刷された順序に通読することからは、多くの効果を期待し得ない。本書を手がかりとして活用し、目的に従って縦横に比較参照してこそ始めて有益な結果が得られる。本書の出現はむしろ、プラーフマナとシユラウタ・スートラとの関係を、個々の祭式につき詳しく検討する余地の依然として今後に残されていることを示している。

第一部と比べて改良と思われることは、訳文中にドヴァイタ・スートラまたはカルマーンタ・スートラの文句を挿入した場合、必ずその箇所を角カッコ内の数字によって明示した点である。筆者は第一部を紹介した際に、紙幅のいちじるしい増加をきたさない範囲で、出典箇所を添えるよう工夫されんことを要望した(東洋学報九)。今この要請を容れ、使用者の便利を計ったことは感謝に堪えない(cf. Preface p. 2)。巻末の索引(pp. 1159-1211)は、本書の内容の多岐・豊富・複雑に照らして、必ずしも万全とは称しうがいが、むしろ編者の努力を讃えるべきで、利用法よろしきを得れば、多大の便宜を提供すること疑いをいれない。

カーシカル博士の序文から明らかであるように、本書のためには未刊行の補遺文献(パリシシュタ)も利用されている。例えばバーラドヴァアージャ・パリシェーシヤ・スートラ (Bhāradvāja-pariśeṣa-sūtra) の中に含まれるアティパヴィトトラ献供 (Atipavītreṣṭi) は始めてここに訳出された (p. 548)。さらに喜望を

ことには、この短いパリシシュタ文献の原文と共に、バーラドヴァアージャ派のシユラウタ・スートラならびにピトリメータ・スートラが近く刊行される旨が予告されている (cf. Preface p. 2, p. 1; p. 8, p. 1)。新タインティリーヤ諸派のシユラウタ・スートラの中、この派のもののみが、いまだ完全に公刊されていない。鶴首してその実現を待つ。

終りに臨み、編纂主任カーシカル博士ならびに英文部を担当するダンデーカル教授の学識と精励とに衷心からの尊敬と感謝を捧げ、重ねて「シユラウタ全書」の順調な進行を祈り、その完成の一日も早からんことを切望する。

(Śrautakośa edited by C. G. Kashikar, vol. I, English section [based on the Kalpasūtras belonging to the various Vedic schools] by R. N. Dandekar, part. II, 12 pp. (Preface by C. G. Kashikar and Contents), pp. 539-1211; Vaidika Sansodhana Maṅḍalā, Poona, 1962.)

スペイン国立古文書館の

ガイドブックについて

生田 滋

十五世紀の末からのヨーロッパ人の海外進出はまずスペイン人とポルトガル人とによつて行われたが、ポルトガル人もつばら東方に進出したのに対し、スペイン人は西方に向つて進出し、中、南米を征服し、北米ではフロリダ、テキサス、カリフォルニアなどに進出し、更に太平洋を横断してフィリピンを征服した。このほか彼等は香料群島、台湾などにも進出して来た。従つて十六世紀以降のフィリピン史に於ては、スペイン語の史料は基礎史料であり、その他の地域の研究にも常にその利用を念頭におかなければならないことはいふまでもない。これらの史料はその殆どが未刊の古文書としてスペイン各地の古文書館、或はメキシコの古文書館に保管されている。これらのうち、スペインの国立古文書館所蔵のものについていえば、一九三〇年頃までにそれぞれの古文書館について一応ガイドブックが出版されたのであるが、出版後既に三十年以上を経過して、入手も殆ど不可能のところがある。ところが、一九五八年及び

一九六二年に新しいガイドブックがスペイン国立古文書館員・図書館員・考古学者協会 (Cuerpo de archivos, bibliotecarios y arqueólogos) の創立百年祭を記念して、各国立古文書館館長の手によつて編集され、古文書館・図書館・博物館専門委員会 (Junta técnica de archivos, bibliotecas y museos) の決議によつて出版された。筆者は三十八年の七月に二回に亙つてスペインに約三週間滞在し、その間に各国立古文書館を訪問したが、その際これらのガイドブックを入手したので、ここにそれを紹介したい。

スペインの国立古文書館は一ヶ所ではなく、四ヶ所に分れてゐる。即ちマドリッドの国史古文書館、シマンカスの中央古文書館、セヴィラのインド古文書館、バルセロナのアラゴン王国古文書館である。これら四つの古文書館は文部省の一局である古文書館及び図書館局 (Dirección general de archivos y bibliotecas) の管轄下にある。次にそれぞれの古文書館の概要と、ガイド・ブックの内容とを紹介しよう。

国史古文書館 (Archivo Historico Nacional)

国史古文書館は、マドリッドの中心であるプエルタ・デル・ソル (Puerta del Sol) 広場からトロリーバスに乗つてアルカラ街 (Calle de Alcalá) を東北に進むと約十五分、アルカラ・デ・エナレーレス街 (Alcalá de Henares) であり、左手にある科学院 (Consejo Superior de Investigaciones Científicas) のアーチをくゞつて入ると左側にある。この古文書館はスペインの中央